

東奈良遺跡の環濠の変遷

木村 健明

1. はじめに

東奈良遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である。1971年に小川水路の改修工事に伴って土器などが採集されたことが、遺跡発見の契機となっている。現在当遺跡の範囲は、小川町、奈良町、新中条町、若草町、東奈良一丁目～三丁目、美沢町、高浜町、天王一丁目・二丁目、沢良宜西一丁目～三丁目にかけての東西約1km、南北約1.2kmに及ぶ。特に弥生時代の環濠集落として著名であり、茨木市を代表する遺跡の一つである。

1971年の発見以降、南茨木駅周辺を中心として、150件近くの本発掘調査が実施されてきた。しかし、出土する遺構・遺物が膨大な量に上っているため、未報告のままとなっている調査も多く、著名な遺跡でありながら、調査成果の発信が十分とはいえず、その全体像を窺うのが困難な状態が続いてきた。

現在、既往調査の図面整理作業を進めつつあり、その過程で集落を巡る環濠の位置や、方形周溝墓の分布状態がより詳細になってきた（註1）。

本稿は、速報的に集落変遷の概略を記すものである。

2. 環濠の様子

図1は、多数の溝が検出されている若草町～東奈良三丁目周辺を中心とする部分である（註2）。現時点では出土遺物の整理まで作業が及んでいないため、溝の時期については既刊の概報に依拠する（註3）。

環濠は弥生時代前期から後期にかけての各時期を通して掘削されている。今回、簡略ではあるが、時期別の図も作成した（図2～4）。

以下で各時期の概略を述べる。

前期（図2） 前期前半に、最も内側の3条が南北約120m、東西約100mの範囲（約9,400㎡）を楕円形状に巡る（註4）。楕円形部分の南東側に「L」字状に屈曲する溝が確認されており、この部分が南北約70m、東西約40mの四角形状に張り出していた可能性もある。内側の3条と外側の3条の間は約40mの間隔がある（註5）。外側

の3条は前期後半から末にかけて掘削されており、南側の様子は不明瞭だが、東西約230m、南北約230mの範囲（約41,500㎡）を巡っているようである。

中期（図3） 前期で最も外側に位置した2条の溝が中期後半に再掘削されている。この2条が中期段階では最も内側の溝となっている。中期の溝は北東部では3条、南西部では7条検出され、地点によって条数に差がある。そのため、複雑に分離・合流している可能性が考えられ、各溝がどのように繋がっていたかを判断するのは困難である。東西約250m、南北約300m（約58,800㎡）を測るが、図3の範囲外からも中期の溝が検出される地点があり、中期の集落範囲は更に広く、今回図示した溝だけでなく、他にも複数の溝によって集落内が区画されていた可能性が考えられる。

また、北端に更に1条の溝が存在する（01-1・88-4・93-1調査区）。この溝を挟んで多くの方形周溝墓が検出されており、墓城内の区画溝であった可能性も考えられる。方形周溝墓は、中期環濠の北・西・東側で検出されており（東側は図3の範囲外）、特定の地区に墓域を設定するのではなく、環濠の周囲一帯に方形周溝墓が営まれていた可能性がある。

後期（図4） 環濠の可能性のある溝は1条のみ検出されている。この溝は東西約260m以上、南北約270m（約55,100㎡）を測る。また、他に南東側に方向を違えた溝がもう1条検出されている。

3. まとめ

以上、簡単ではあるが、東奈良遺跡の環濠について記してきた。

大まかな流れとしては、前期から中期にかけて複数の溝で囲まれる範囲が拡大していき、後期になると環濠が1条のみとなることが判明した。

図1で破線を入れていない阪急電鉄京都線の西側は、現在も耕作地として利用されているため、発掘調査が行われていないが、建物などで攪乱されていないため、遺構は良好に保存されていると



図1 東奈良遺跡環濠・方形周溝墓検出状況

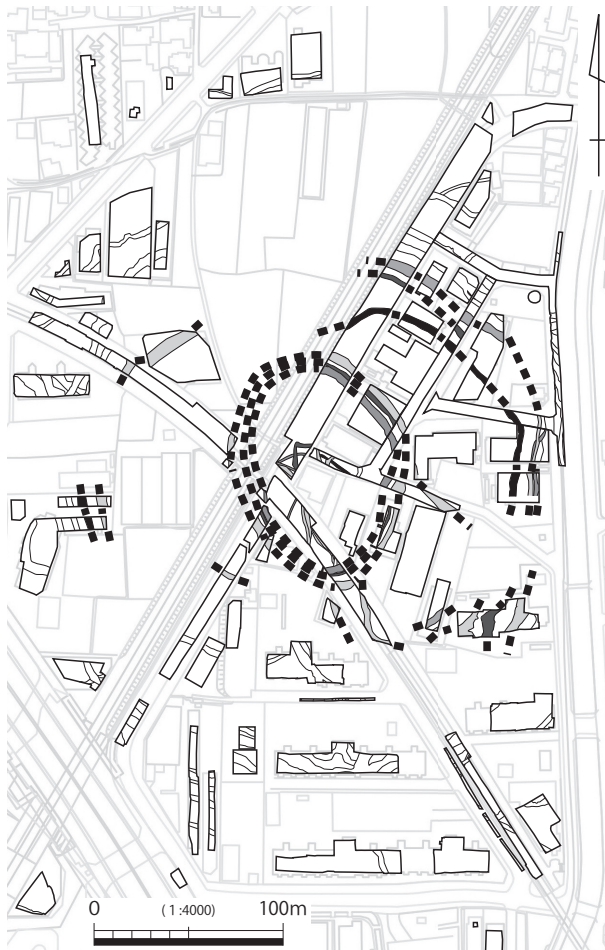


図2 前期環濠の様子

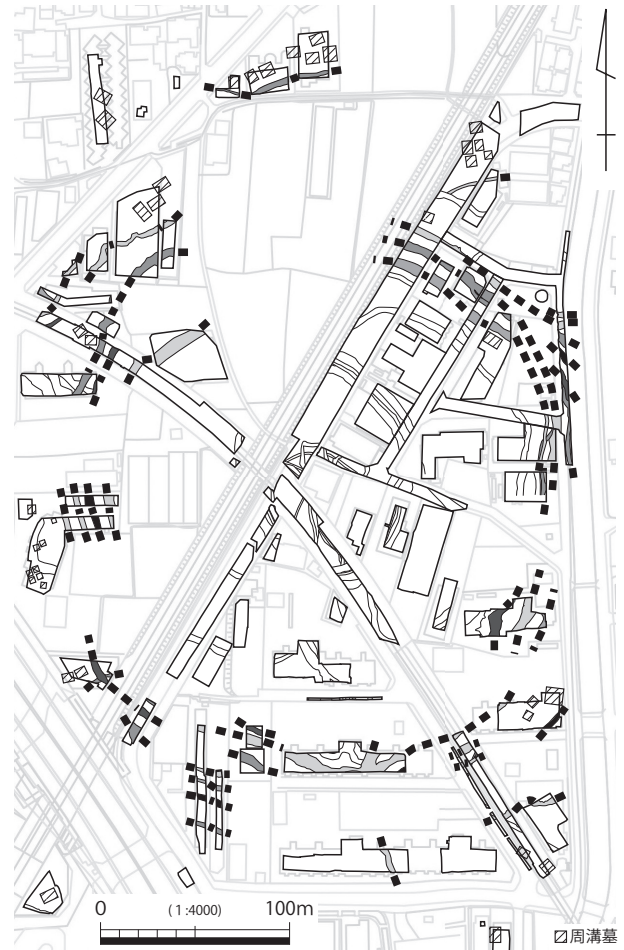


図3 中期環濠の様子

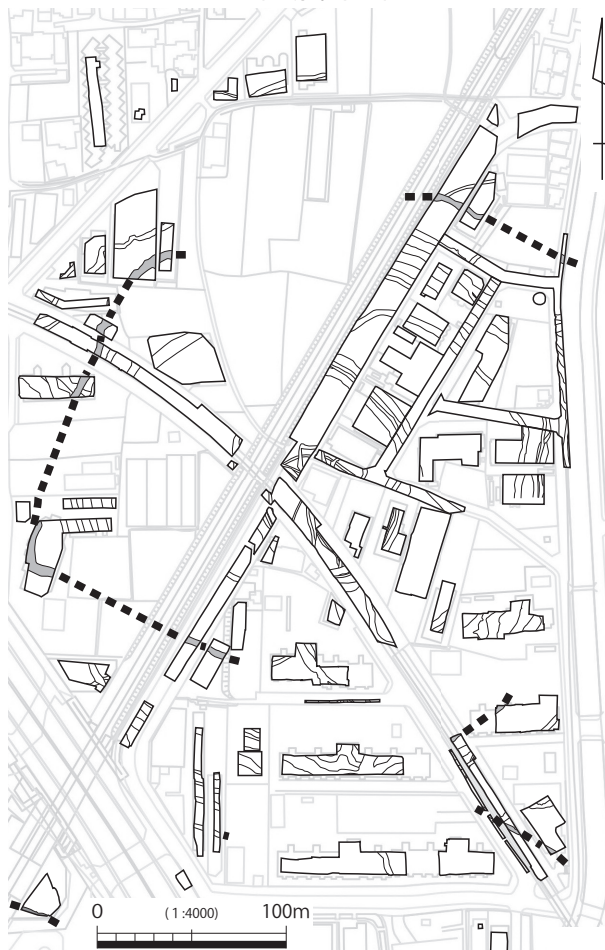


図4 後期環濠の様子

思われる。

また、今回提示していない西側の天王一丁目・二丁目周辺は、複数の流路が錯綜している状況が検出されており、それぞれの繋がり是不明であるが、弥生時代には頻りに流れが変わる低湿な環境であったと考えられる。また、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺物が多量に出土している北西-南東方向に延びる直線的な「大溝」が検出されており、この溝の掘削によって、錯綜する流路の固定が図られたのかもしれない。

本稿は既往の調査結果の整理途中で判明した経過であり、今後は遺物整理作業の進展によって、より細かく時期ごとの集落の様相を復元していくようにしたい。

註

1) 『新修茨木市史 第一巻』(図27・28・29)及び第七巻(図123・128)に『平成19年度発掘調査概報』の図面が掲載されており、また、『東奈良』を基に概略が述べられている。これに大きな変更を加えるものではないが、改めて既往の調査成果を追加することで判明した点

もあり、新たに提示するものである。

2) 図1の範囲外でも溝は検出されており、集落規模がこの範囲で収まるものではない。今回は中心部と考えられる部分を抽出して示した。また、この部分は東奈良遺跡の北東部に位置する。

3) 既刊の各概報は出土遺物も掲載しているものと、文章のみで時期を示しているものがあり、情報量に精粗があるが特に区別していない。そのため、将来的に出土遺物の整理作業が進展すれば、また異なった様相が判明する可能性はある。

4) 弥生時代前期の環濠全体が検出された神戸市大開遺跡では40m×40mの規模を測っており、東奈良遺跡よりも規模が小さい。

5) 内側と外側の溝の間は空閑地ではなく、ピットや土坑が密に検出されている。ただし、全ての遺構が前期のものではなく、中期以降の遺構も存在し、各遺構の時期を特定するのは容易ではない状況である。

参考文献 (五十音順)

茨木市 2012 『新修茨木市史 第一巻 通史 I』 pp. 283-299

茨木市 2014 『新修茨木市史 第七巻 史料編考古』 pp. 112-143

茨木市教育委員会 1987 「5. 東奈良遺跡 86-5 H・N、F-5-E・I 地区」『昭和 61 年度発掘調査概報 I』 pp. 13-18

茨木市教育委員会 1988 「VI 東奈良遺跡 (87-3) H・N F-5-E・I 地区」『昭和 62 年度発掘調査概報 I』 pp. 18-20

茨木市教育委員会 1989 「IV 東奈良遺跡 (88-3) H・N E-5-G・K 地区」『昭和 63 年度発掘調査概報』 pp. 27-34

茨木市教育委員会 2002 「東奈良遺跡」『平成 13 年度発掘調査概報』 pp. 36-37 (東奈良遺跡 01-1 調査)

茨木市教育委員会 2003 a 『東奈良』—東奈良土地区画整理事業に伴う発掘調査概要報告— (東奈良遺跡 99-1 調査)

茨木市教育委員会 2003 b 「7. 東奈良遺跡」「11. 東奈良遺跡」「12. 東奈良遺跡」『平成 14 年度発掘調査概報』 pp. 26-48、57-68 (東奈良遺跡 02-1・02-2・02-3 調査)

茨木市教育委員会 2004 「5. 東奈良遺跡」「8. 東奈良遺跡」『平成 15 年度発掘調査概報』 pp. 30-36、54-58 (東奈良遺跡 03-1・03-2 調査)

茨木市教育委員会 2005 「1. 東奈良遺跡」「2. 東奈良遺跡」「3. 東奈良遺跡」「9. 東奈良遺跡」『平成 16 年度発掘調査概報』 pp. 1-39、74-80 (東奈良遺跡 03-3・03-6・04-1・04-2 調査)

茨木市教育委員会 2006 「9. 東奈良遺跡」『平成 17 年度発掘調査概報』 pp. 64-67 (東奈良遺跡 05-1 調査)

茨木市教育委員会 2007 「7. 東奈良遺跡」『平成 18 年度発掘調査概報』 pp. 76-97 (東奈良遺跡 06-2 調査)

茨木市教育委員会 2008 「3. 東奈良遺跡」『平成 19 年度発掘調査概報』 pp. 14-78 (東奈良遺跡 06-3 調査)

茨木市教育委員会 2010 「3. 東奈良遺跡」「4. 東奈良遺跡」『平成 20 年度発掘調査概報』 pp. 19-31 (東奈良遺跡 07-4・07-5 調査)

大阪府立弥生文化博物館 2001 『弥生都市は語る—環濠からのメッセージ』

神戸市教育委員会 1993 『大開遺跡』

東奈良遺跡調査会 1979 「F-4-N、G-4-B 地区」『東奈良遺跡発掘調査概報 I』 pp. 33-49 (東奈良遺跡 72-6 調査)

東奈良遺跡調査会 1981 「第三章 調査概要 第3節 II-A 区、第4節 II-B 区」『東奈良遺跡発掘調査概報 II』 pp. 24-29 (東奈良遺跡 77-3 II-A・B 区)

補注

脱稿後、以下の文献の存在を知った。弥生時代前期の東奈良遺跡の様相についてまとめられており、本来本稿においても参照すべきものであった。

弥生時代前期の環濠の最も内側に一辺 30m~40m の区画を想定されている。本稿とは溝の接続が異なっているが、この点に関しては、今後遺物整理作業の進展を踏まえた上で判断していきたい。

濱野俊一 2018 「三島平野の弥生の始まりと安満・東奈良—初現期の東奈良遺跡の様相—」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』株式会社雄山閣 pp. 223-227